

【論文】

江戸期近世教育と近代公教育の思想と哲学
—私塾・郷学・寺子屋における儒学・朱子学—
(教育の内容と制度の歴史的検証)

The Thought and Philosophy pertaining to The Education in
Tokugawa Era and The Modern Public Education
:Confucianism and Neo-Confucianism in Private Academies
and Village and Temple Schools
(Historical Verification of the Confucianism and the Role it played
in the Education of Tokugawa era and Meiji-Modern era)

木本 肇

《abstract》

In Edo period (1603-1867) Tokugawa Shogunate positioned Confucianism, especially Neo-Confucianism as the core of learning and education. Confucianism is a philosophical wisdom and code founded by Confucius and other Confucians in ancient China. It is a philosophical teaching regarding ethical codes and values in human life. Ethics, such as humanity, justice, loyalty and filial piety, were the central cores in the Confucianism philosophy.

The learning of Confucianism thus became highly recommended for the administrative purpose and Tokugawa Shogunate opened lots of educational institutions and local domains as well. Besides these institutions, a lot of private academies (*shijyuku*), village schools (*gougaku*) and uncountable numbers of temple schools (*terakoya*) were also founded throughout the country. In all these academies and schools also, Confucianism and Neo-Confucianism were taught as main curriculums. Around the time of closing days of Edo era, when agricultural economy and merchandise business became flourished, there arose the need for the learning also among ordinary people. Great majority of masses, consequently, got enrolled in village and temple schools and also private academies for business or academic reasons. The enrollment ratio in the temple schools were unbelievably high, to be sure, the world-highest, which indicates the highest literacy rate. Thereby it can be safely suggested that great number of Japanese in this era learned much about Confucianism and got heavily affected by its philosophy and senses of values.

The Confucianism education was then taken over to the modern public education started in the Meiji Restoration. The Imperia Rescript on Education was drafted by prominent Confucian Scholars. The moral discipline (*shushin*) was compiled according to the Confucian moral codes. Chinese classic, which includes lots of Confucian and Neo-Confucian teaching materials, was one of the four major subjects. And Tokugawa government schools were transformed into colleges and universities, and many of domain schools into middle and high schools, and private academies into higher educational institutions and village and temple schools into elementary schools. We can, thereby, conclude that the education in Tokugawa period; private academies over a few thousands, village schools over one thousand and temple schools a few-hundred-thousands, played significant role in constructing the modern public education

successfully both in curriculum phase and system phase, needless to say about the education in the government and local domain schools, as stated in the previous paper.

1 はじめに

我が国の近代公教育は、1872年(明治5年)の「学制」の発布に始まり、戦後の教育改革を経て、爾来 150 年の歴史を数えようとしている。この近代公教育の成立と発展は、その礎を徳川幕藩体制下の教育すなわち幕府直轄の教育機関や諸藩の藩校さらには私塾・郷校・寺子屋の教育に負うところが大である。すなわち、17世紀にはじまる近世の組織的教育が維新後の近代公教育の誕生・発展に大きく貢献している。この近世教育の発展・充実は、国民全体の儒学・朱子学を中心とする高い知識と能力および高い識字率にも支えられている。

本稿では、この近代公教育の成立と発展を支えたファクターを幕府と諸藩の教育機関(『信愛紀要』60号で検証済)に加えて、私塾・郷学・寺子屋の教育及びその環境が果たした歴史的役割を検証するものである。

幕府・諸藩の教育の中心は、儒学・朱子学の学問であるが、民間でも漢学(儒学・朱子学)を教授する私塾・郷校が数多く開設されるとともにあまた開設される寺子屋でも儒学・朱子学の理念と教えは、広く伝授された。こうして成熟・定着した儒教価値観及び教育哲学は、明治の近代公教育に引き継がれ、その理念・価値観は、「教学聖旨」をはじめ「教育勅語」や「修身」さらに「漢文教育」などに踏襲された。また、幕府学校は、帝国大学や高等専門学校に、多くの藩校と私塾は、旧制高等学校・中等学校・専門学校に、郷校・寺子屋は尋常小学校に移行するなど、システム面においてもその礎となった。(木本 2019b pp.24-25)

さらに、戦後の教育改革においても、儒教価値観は、国語漢文教育や道徳教育に伝承された。このように、私塾・郷校・寺子屋の近世教育は、幕府および諸藩の教育は言うに及ばず、わが国近代公教育の構築に大きな役割を果たしてきた。

2 江戸期教育の根本哲学となる儒学・朱子学

《以下 2 は、木本(2019c)でも論じていることであるが、近世教育の基本哲学となる儒学・朱子学は、本稿においても基本

哲学として共有するものであることから、ここに再掲する。》

江戸期の学問の中核をなすのは、**儒学・朱子学**である。儒教の道たるについて、佐久間は、次のように述べている。「儒者の道といふは、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友、此五つの道をよく行ひ得たる人を道を得たるという也」(佐久間 2007 p.45)。儒教の理想は、高徳の涵養であり、教養を備え徳の涵養を目指すものである。

「為政以德」「学而不思則罔、思而不学則殆」「以徳導之」(孔子)「勞心者治人」(孟子)

儒学は、人の学ぶべき徳性を仁、義、礼、智、信の「五常」とし、人間関係を父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の「五輪」とし(土田 2011 pp.21-22)、この徳を「四書(大学、中庸、論語、孟子)・五經(易經、書經、詩經、礼記、春秋)」の経典で学ぶ学問で、根本思想「仁」即ち「愛」を最高道徳としている(土田 2011 pp.25-26)。

「樊遲問仁、子曰愛人」「克己復礼為仁」(論語)「夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、可謂仁之方也」「仁者先難而後獲、可謂仁矣」(論語)「温良仁本也、敬慎仁地也」(礼記)》

孔子の「仁」は、自分の思いを自覚し、他者の心を思いやることである。(土田 2011 p.26)

「其仁者己欲立而立人、己欲達而達人」(論語)
故に、仁愛は、肉親、年長者への愛すなわち「孝」である。

「孝悌之者、其為仁之本与」(論語学而篇)》
土田は、孔子の「孝」が、君臣の誼では「忠」となるとしている。(土田 2011 p.28)

「父子之道天性也、君臣之義也」「事親孝、故忠可移於君」(孝經)》

こうして、儒教の最高道徳「仁」「孝」から「忠君」が生まれる。
「忠臣求孝子門」(後漢書、十八史略)》

儒学では、経書の学習が基本である。経書には、「五經」「六經」「十三經(四書、五經、孝經、春秋三伝(左伝、公羊伝、穀梁伝)ほか)」と様々な分類と数え方がある。

《五經》

*「易經」 世の陰陽により自然と人生の変化の法則を説明

するとともに陰陽占術を著す。

「君子豹变、小人革面」「積善家必有餘慶、積不善家必有餘殃」「窮即變、變即通」「君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘亂」「君子以多識前言往行、以畜其德」

*「書経」 儒教の理想的政治論。歴朝の聖王賢臣の徳政（慈政）を孔子が編纂。

「満招損謙受益」「罪輕疑、疑功重」「作德心免日休」「有其善、喪厥善、矜其能、喪厥功」「臨下以簡、御衆以寬」「居上克明、為下克忠、檢身若不及」

*「詩経」 中国最古詩篇。3000余篇を孔子が311に再編。

「凱風自南、吹彼棘心」「我心匪鑑、不可以茹」「如切如磋、如琢如磨」

*「礼記」 儀礼の注釈と政治、学術、習俗等の禮に関する説。「凡人之所以為人者、礼儀也」「雖有至道、弗学不知善也」「記問學不足以為人師」

*「春秋」 春秋時代の歴史書。諸侯の政治、戦争、外交や自然災害についての孔子の作。

「病入膏肓」「問鼎輕重」「衆怒難犯、專欲難成」

*「孝経」 儒教の根本理念の「孝」を天子、諸侯、大夫、士、庶民別に、孔子が弟子に語った教え。

「孝、始於事親、中於事君、終於立身」「孝、徳之本也、教之所由生也」「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」

*「春秋左伝」 孔子の「春秋」の背景を解説する倫理道德書。「富而不驕者鮮、驕而不亡者」「衆怒難犯、專欲難成」

朱子学は、南宋の儒学者朱熹の理気説を根本原理として、儒学を基礎に新たに体系化した学問で、ネオ儒学とも呼ばれる。伝来は、13世紀初頭で、18世紀中期、江戸幕府の官学となり、幕府の諸機関や諸藩の藩校は言うに及ばず、多くの私塾・郷校・寺子屋においても教育の中核的役割を果たす。

理気説は、宇宙、万物の原理を「理」、物質・存在・運動を「氣」とする「理氣二元論」で、性（人間の本性）は理とする「性即理」及び上下関係秩序の「大儀名分論」が、四書（大学、中庸、論語、孟子）で説かれる人生論・道徳論である。（小島2017、木本2017 pp.18-19）

朱子学は、人間誰しも学問・努力すれば「窮理」に至り、聖人になれるとする。

「格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治国・平天下」（「大学」）

朱子学の学問では、「四書」が全儒教經典の中核とされ、ま

ず「近思錄」を読んで、四書の「大学」「論語」「孟子」「中庸」を順次読むこととされた。（小倉 2012 p.63）

*「小学」 宋代に朱熹が初学者用に纏めた修身・作法書。古聖人の善行、箴言や人倫の教訓、年長者隨行時歩行、溫柔孝悌、恭敬尊長、忠臣不事二君、責善朋友道を説く。

*「近思錄」 朱熹の編纂した朱子学の入門書。格物窮理、修己齊家・治国平天下、克己復礼、聖人・賢人に係る哲学書。

「威儀行儀、以養德也」「学者道、内存己心然所。專己分限忘、得其理近所」「推己及物以養人」「孟子曰、惻隱之心、仁也。後人遂以愛爲仁」

《四書》

*「論語」 孔子の人生観、学問論、政治論、君子論、人間論の道徳律。「仁、孝悌、禮、智、信」等にかかる哲学体系で、儒教哲学の根本的理念・価値観を成す。

「学而時習之、不亦悦乎」「巧言令色、鮮仁」「礼之用和為貴」「為政以德」「吾十有五而志乎学、五十而知天命」「温故而知新、可以為師矣」「里仁為美」「弟子入則孝、出則悌、謹而信、汎愛衆而親仁」「吾日三省吾身、為人謀不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」「夫子之道、忠恕而已矣」

*「大學」 国を治める者は、学問を修めるとともに自己修養により徳を身に付ける。そのため「格物・致知」「誠意・正心」に心掛け、「修身・齊家・治国・平天下」を実現し、「修己治人」の政の実現を説いている。

「徳者本也、財者末也」「君子有大道、忠信以得之、驕泰以失之」「所藏乎身不怨、而能喻諸人者、未之有也」「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」

*「孟子」 孔子哲学を継承・発展させ、仁、誠、和、思いやり、慈しみを説いている。

「至誠而不動者未之有也」「天時不如地利、地利不如人和」「人本性善也」「無惻隱之心、非人也」「仰不愧天、俯不愧也」「惻隱心仁端也」「以佚道使民、雖勞不怨」「天時不如地利、地利不如人和」

*「中庸」 感情の平静状況を「中」とし、感情の然るべき節度が「和」「誠」で、この調和の状況を理想とする。

「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人」「在上位不凌下、在下位不援上、正己而不求於人、則無怨」「莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其独也」

3 私塾=漢学塾（儒学・朱子学）、蘭学・医学塾、国学塾、洋学塾

幕府及び諸藩の教育に加えて、民間でも、より高いレベルの教育ニーズに応える学習機関が各地に誕生した。いわゆる私塾である。漢学を始め、多彩な学問所が各地に開校し、豊かな人文科学や自然科学領域の専門教育が行われ、士族、庶民を問わずともに学問に勤しんだ（士庶共学）。

私塾は、漢学（儒学・朱子学・陽明学・古学・心学）塾、国学塾、医学・蘭学塾、洋学塾等、その種類は、多岐分野にわたる。とりわけ、幕府は、儒学と朱子学（寛政異学の禁）を学問の中心として奨励したこともあり、極めて多くの漢学塾が国中津々浦々に開設された。

- (1) 漢学塾=萩の吉田松陰の「松下村塾」、大分の広瀬淡窓の「咸宜園」等。
- (2) 蘭学・医学塾=大阪の緒方洪庵の「適塾」、長崎のシーボルトの「鳴滝塾」等。
- (3) 国学塾=江戸の本居宣長の「鈴屋」、京都の木下順庵の「蘿塾」等、
- (4) 洋学塾=江戸の佐久間象山の「象山書院」、伊豆の江川英龍の「葦山塾」等

「日本教育史資料」8.9巻に収められた私塾表によれば、1868年（M元）以前に設立された私塾は1067校、明治5年までに存在した塾だけで1493の様々な私塾が確認できる。うち、漢学塾612校（41.3%）、和漢学を含む高度な書（儒書を教材）の塾415校（28.0%）、医学（37校）を中心とする洋学47校（3.2%）、国学9校（0.6%）、算學175校（11.8%）（「愛知県教育史1巻」 pp492-95）で、漢学及び和漢学関連が、70%と圧倒的に多い（ルビンジャー 1979 pp.10-11）。こうした中で、「学問とは、漢籍を学ぶことである。」との観念が定着し、明治から戦後の教育改革まで、その観念は、連綿と受け継がれていった。

3.1 漢学塾（儒学・朱子学・古学・陽明学・心学）

《藤樹書院》

近江聖人と称せられる陽明学者の中江藤樹（1608-1648）が近江に開塾（1638）。儒学の「自天子以至於庶民、是皆以修身為本」（大学）、朱子学の「聖人学びて至るべし」（近思録）に

学び、王陽明の「聖人豈不可学而至焉乎」（伝集録）に学び、日本の陽明学を確立した。「陽明学は、「格物致智」（物をただして智に至る）が基本テーマで、様々な欲望をそぎ落とし無になることで物事の本質が見えるとする。即ち、人間が本来もちあわせている是非・善惡を悟ることが「良知」で、それに至ることが「致知」である。」（海野 2018 p.198）

藤樹書院の学問は、朱子の説く五輪・五常（父子に親、君臣に義、夫婦に別、長幼に序、朋友に信あり）に三綱（明徳、民親、至善）を加え、学問の方法に朱子の「博学、審問、慎思、明弁、篤行」に「天命畏れ、徳性尊重、存養持敬」を加え、学問と教育が人間の内省を重視する道徳性を強調している（「藤樹規」 1639）。

藤樹の説く「孝」の思想は、近代修身教科を通して、日本人の道徳価値観の基盤を成すものである。

藤樹書院の学問は、弟子の二見直養が「藤樹先師学術旨大略」（1721）の中で「会座を重んじ、講習・討論・切磋琢磨し、孝悌を勤め、補仁の益を勤め、相助け、相長じて日新の功を励ます。」と記している。多くの村民、商人に儒学、陽明学を教化するとともに備前池田光政（郷学閑谷校開設）に仕える熊沢蕃山や京都学館を開き陽明学を諸藩に広めた淵岡山らを世に送り出す。我が国私塾の元祖である。

《闇斎塾》

山崎闇斎（1619-1682 儒学者・朱子学者・神道学者）が1655年、京都堀川に開いた朱子学の私塾。君臣・子弟の関係を厳格に説き大儀名分を重視する思想は、幕府の官学となるが、後に尊王思想に大きな影響を与えた。門弟 6000人の当代一の家塾。三代將軍家光の弟会津藩主保科正之の侍講。

《咸宜園》

豊後日田の豪商の長男で儒学者広瀬淡窓（1782-1856）が開塾（1805）。後に、咸宜園とする（1817）。「三奪の法」により、身分、出身、年齢にとらわれず武士、町人の身分を問わず平等に教育。塾生の半数以上が農民や町人、次いで、僧侶、医者の子弟で、武家の子弟（約 6%）もいた。文字通り士庶共学の庶民教育の学校であった。学んだ者は、帰郷後は各地で私塾や寺子屋を経営し、咸宜園の教育実践は、全国各地に広がりを見せた。教育は、「四書五經」の儒学を中心に、このほか数学、天文学、医学等、様々な分野でも講義。1897年（明治30）の閉塾までに門下生 5000人を教育する近世最大規模の私塾である（木本 2019d p.20）。

門下生=大村益次郎（洋学者、近代陸軍創設）、高野長英（蘭

学医、洋学者)、岡研介(蘭学医、医学・生理学確立)、秋月新太郎(東京女高師校長)、長三洲(「学制」起草、大正天皇侍講)(未廣利人 2014)。

《改心樓》

儒学者大原幽学(1797－1858)は、1850 年下総の地に改心楼を創立、「男子会」「女子会」「小児会」の別に組を設け、心理学(新儒教)、農業経営、道徳等を指導、農民教化運動に取り組んだ。庶民対象の農業塾である。「幽学は、年間農業計画を立案させるとともに苗の植え方、肥料の作り方、二毛作農法等、実地に技術指導を行い、ついには世界初の農業協同組合まで創立させた」(童門 1993 pp.50－51)。

《松下村塾》

1842 年、松蔭の叔父玉木文之進が開塾。塾は、武士、下級武士のみならずひろく町民・農民も受け入れる士庶共学の私塾。吉田松陰(1830－1859)は、藩校明倫館の塾頭(山鹿流軍学師範)から諸国遊学(佐久間象山から西洋学、蘭学、海防学を学ぶ等)後、ペリー来航時の米艦移乗失敗に伴う野山獄幽閉(「講孟余話」や「武教全書(儒学を基本にした武士道の在り方)」等を獄中で講義)後の 1857 年、文之進の松下村塾を引き継ぎ、儒学(孝経、大学、孟子、中庸)、国学(古事記伝、日本書紀)、兵学(山鹿流、武教全書、西洋兵学)、史学(日本外史)、洋学、地理、算術等を講じている(古川 1995 pp.166－68)。講義は、単にものを教授する講義だけでなく、主体的に考え、自分の思想・哲学を創り上げる講義であった。その中から、尊王攘夷思想が醸成され、討幕に傾倒、明治維新を支える多くの人材を輩出した。

久坂玄瑞(尊皇攘夷論者)、高杉晋作(尊皇攘夷論者、奇兵隊)、伊藤博文(初代総理大臣)、山縣有朋(総理大臣、近代軍創設、陸軍総監)、前原一誠(明治政府兵部大輔、萩の乱挙兵)、品川弥次郎(明治政府農商務大輔、仏公使)、杉山松助(尊王攘夷論者)、入江久一(尊王攘夷論者、奇兵隊創設尽力)、山田顕義(明治政府兵部大丞、元老院、司法大臣、諸国公使)他多数(古川 1995 pp.450－489) 松陰を朱子学者または陽明学者ときめつけるのは誤りである。(学問領域は極めて多様であり)「松陰學」と称すべき学統を建てた。」(古川 1995 p.178 ()は、筆者加筆)

江戸は、行政の都であることから、学問の発達も早く、官学所に加えて、多くの私塾が早くから開設された。

《謫(けん)園塾》

1709 年、儒学者荻生徂徠(1666－1728)が、江戸日本橋に開いた儒学塾。儒学を純粹に実証的に解釈する古文辞學(徂徠儒学)を確立。伊藤仁斎の古義學に対抗する一大学派。

《学問所会輔堂》

將軍吉宗の教化政策に則り幕府の財政援助のもと、儒学者菅野兼山が1724年、江戸深川で始めた半官半民で士庶共学の私塾。儒学教育により多くの武士、町人を教導した。

《三計塾》

日向の貧しい学者の子安井息軒(1799－1876)は、苦学刻苦勉励の末、1839 年、江戸で儒学の私塾を開設した。息軒の儒学者としての学識は、当代随一で、本場中国の學會からも絶賛されるほどであった。彼の豊かな見識を慕い國中から多くの門弟が入門。門弟は、2000 人を優に数えた。

門人=陸奥宗光(外交官、不平等条約改正、下関講和条約締結)、谷千城(陸軍中将、陸士学校長、外相、貴族院議員)

大阪は、商業を中心とする諸産業が発展し、豊かな町人の間に儒学や漢詩文等を学ぶ町人文化が醸成され、多くの私塾や学問所が開設された。

《懷德堂》

懷德堂は、1724 年(享保 9 年)、大阪商人の財政支援のもと、山崎闇斎(1618－1689)の門下生浅見絅斎(1652－1711)に師事し儒学を学んだ三宅石庵(1665－1730)を学主に迎えて開設された大阪商人設立の町人儒学教育の私塾である。やがて、將軍吉宗の教化政策に則り、中井甕庵(1693－1758)の尽力により幕府の認可を得て、大阪学問所と称される幕府公認の民間私塾となった(1726)。多くの町人武士が学問する「士庶共学」の場であった。

教材は、「論語」「孟子」「中庸」「大学」「書經」「近思錄」等で儒教に基づく民衆教化に大きな力を發揮し、多くの優秀な儒学者を輩出した。

町人学者としては、経済學書「三貨図彙」を著した草間直方や科学者(本草学、植物学、天文学、暦学、経済学、日本人初の天動説理解者)として大成した木村蒹葭堂らを輩出するとともに昌平坂学問所(1797)や諸藩藩校の儒官(古賀精里(佐賀藩出身)、柴野栗山(四国出身)も多く育成している。また、「雨月物語」を著した古典研究者上田秋成(1734－1809)も懷德堂で学んでいる。

《混沌社》

1765 年(明和 2)、大阪に成立した詩文を中心とする学芸結

社。西日本各地および大阪の町人学者が結集組織し、詩文とともに朱子学が研究された。

門弟→頼春水(頼山陽の父)(安芸→広島藩儒官)、尾藤二州(伊与→昌平齋教授)、管茶山(備後→詩人、廉塾起塾)

《水哉館》

1766年(明和3)、懐徳堂4代学主中井竹山の子で朱子学者中井履軒(1732-1817)が大阪和泉に起塾。履軒は、経書の研究者として大成。

門弟=大分臼杵の麻田剛立(医学者、天文学者)(麻田の孫弟子に天文学・地理学の伊能忠敬)

《洗心堂塾》

町奉行大塩平八郎(1793-1837)が1817年大阪の地に開いた陽明学の私塾である。学問は「四書・五経」を中心に「孝経」も重視するとともに武道も取り入れた。陽明学に則る仁政の在り方を教える塾である。塾生は、藩士およびその子弟が多く、農家・商家出身者も一定数確認できる。塾生70名中、武士36、農民出身者16、医師13、町人・神官5(海原1973)。

1837年の大飢饉に起きた大塩の乱は、摂津能勢の乱、越後柏崎の乱、生田万の乱等、多くの狼火が上がり、やがて、討幕の運動に広がる明治維新の震源でもあった(童門1993 pp.70-71)

京都は、文化・教育のメッカであった。「平安人物志」文政5年(1822)版によれば、京都の私塾に学ぶ者は、儒学72名、医学67名、詩文27名で、儒学・朱子学を学ぶ者が一番多い。

《講習堂》

京都の近世儒学は、朱子学の祖とされる藤原惺窓(1561-1619)にはじまり、門下には、林羅山(1583-1657=家康・秀忠・家光の侍講)、那波活所(紀州藩儒学者)、松永尺五がいる。1637年(寛永14)、松永尺五((1592-1655)が開塾した儒学塾で、門人5000人超。古義堂と並ぶ近世を代表する巨大私塾である。

《闇斎塾》

山崎闇斎(1619-1682 儒学者、朱子学者、神道学者)が京都堀川に開いた朱子学の私塾(1655)。君臣・子弟の関係を厳格に説き大儀名分を重視する思想は、幕府の官学となるが、後に尊王思想に大きな影響を与えた。門弟6000人の当代一の家塾。会津藩主保科正之(三代將軍家光の弟)の侍講。《蘿塾》

1660年ころ、松永尺五の門下生木下順庵(1621-1698)が

京都東山に開塾。後年、江戸幕府に仕官。新井白石(幕府儒学者、正徳の治)、室鳩巣(幕府儒学者、六諭衍義大意)祇園南海(紀州藩儒学者)らを育成した。

《古義堂塾》

町人学者の伊藤仁斎(1627-1705)は、儒学者・朱子学者であったが、後に朱子学および陽明学の学問的矛盾・弱点を指摘し、孔子・孟子の学問的原点への回帰を目指し、「論語」「孟子」「中庸」「易書」「大学」「近思録」を純粹に本質を学問する「古学」をたちあげ、1662年、京都堀川の地に開塾した。仁斎は、幕府の権威や官学に阿ることなく、自己の信念(古学)に生き、孔子・孟子の純粹な普遍的価値観を重視することで、学問的人格の完成を成した学者であった。仁斎は、「惻隱」「醜惡(自分の欠点を恥じ他人の悪を憎む)」「辞讓(へりくだり)」「是非(善惡の判断)」の心は、儒学の求める「仁」「義」「礼」「智」に至る基礎であり、教育によって獲得できるとしている。学問の方法は、その日の講義者が四書五経の經典を講じ、講釈についての質疑・協議が繰り返される。開塾45年で、門弟3000人を数える一大私塾で、伊藤東崖(古義堂二代目塾頭、堀川学風大成)、中江岷山(古学塾開設)、北村篤所(大和の藩校遷喬館教授、藩主侍講)、小河立所(堀川学風塾開設)等、多くの優れた学者を育てた(「平安人物誌」1768)。塾生は、庶民が圧倒的多数を占める庶民塾である。「1681~87年の塾生身分帳では、藩士(24%)浪人(15%)で39%、医者(29%)を中心に庶民階級が59%を占めている」(加藤1940)。

《心学講舎》

農家出身の石田梅岩(1685-1744)は商家に奉公するかたわら独学で儒教・道教・神道からなる平易な町人哲学(石門心学=道徳教)を確立し、1729年自宅に私塾「心学講舎」を開いた。梅岩の講釈では、「四書・五経」「孝経」「小学」「近思録」「老子」を通して、心の修養と正しい生き方が易しく平易に説かれた。「梅岩は、自著「都鄙問答」で、「聖人ノ道ハ心ヨリナス.....心性論が学問の中心である。」(佐久間2007 p.45)商人の子で梅岩の一番弟子手島堵庵(1718-1786)は、石門心学を全国に広げ、江戸後期には、武士、商人、農民にも広く普及し、180以上心学講舎が全国津々浦々に開設された。《弘道館》

朱子学者皆川淇園(1734-1807)が1805年、京都に開塾。経書の解釈研究家(折衷考証学者)。儒学・易学者。門弟3000人(武士、僧侶、医師、商人等)の一大朱子学塾である。

3.2 医学・蘭学塾

蘭学・蘭方医学の歴史は、私塾に始まる。蘭学の教育は、蘭学解剖書「ター・ヘルアナトミオ(邦訳=解体新書)」を著した蘭医杉田玄白(1733—1817)の蘭学私塾「天真樓」(1820年頃)に始まる。蘭学医前野良沢にも学び、この私塾第一の弟子大槻玄沢(1757—1827)は、蘭学塾「芝蘭堂」を江戸に開く(1789)。我が国初の本格的蘭学塾で、100名を超す著名な蘭学者を育てている。

大阪でも、蘭学塾は、庶民の間を含めて一気に普及拡大する。芝蘭堂に学んだ小石元俊(1743—1809)は、晩年医業のかたわら医塾「究理堂」(1801)を開き弟子の教育に当たった。また、大阪の傘屋職人ながら芝蘭堂に学んだ橋本宗吉

(1763—1836)(4か月の留学で蘭語4万語修得)は、蘭学教育の塾「絲漢堂」を開塾し(1801年頃)、そこに学んだ町人蘭学者中天游(1783—1835)は、蘭学塾「思々齋塾」を開塾し(1818)、そこに備中足守藩下級藩士の子緒方洪庵(1810—1863)が学んだ。洪庵は、後に蘭学医塾「適塾」(1838)を開塾する。(梅溪 1980 pp.8—9)。ここでは、塾頭福沢諭吉(1834—1901)を育て、やがて、江戸に出た福沢は、蘭学塾を開塾し(1858)、維新後、私學「慶應義塾」(1868)を開学する。

江戸の「芝蘭堂」、大阪の「適塾」、長崎の「鳴滝塾」は、蘭学・蘭方医学の普及に大きな役割を果たした。ここにも医師のみならず農民、町民、軽輩の士卒が全国から集まつた。農民の子伊東玄朴(1800—1871)は、塾を終え、江戸に出てから、蘭学塾象先堂(1826)を開塾して多くの蘭方医を育てるとともにわが国初の種痘所を開設する等、西洋医学の進歩・普及に大きな役割を果たした。水沢藩士の子高野長英(1804—1850)も優れた蘭方医であったが、蚕社の獄に連座、終生入牢の身となつた。このように私塾の教育は、土庶の別なくあらゆる身分背景の向学の者に開かれた教育機関であった。

《芝蘭堂》

蘭学者・蘭方医の大槻玄沢が(1757—1827)が、杉田玄白、前野良沢から蘭学・医学を学び、長崎で出島の通詞からオランダ語を学び、1786年頃、江戸で開塾した蘭学塾。江戸期の蘭学研究の中心、橋本宗吉等100余名の蘭学者を育てた。

《絲漢堂》

傘職人出身の橋本宗吉(1763—1836)が、大槻玄沢の「芝蘭堂」に入門し、蘭学・蘭医学を学んだ後、1802年ごろ大阪で開いた蘭学塾。橋本の絲漢堂に学んだ中天游(1783—1835)

医師、蘭学者)は、蘭学塾「思々齋塾」を開き(1818)、そこで蘭語を学んだ緒方洪庵は、大阪船場で「適塾」(1838)を開塾する。橋本は、大阪蘭学の祖。芝蘭堂は、蘭学私塾の元祖。《思々齋塾》

橋本宗吉の蘭学塾絲漢堂に学んだ中天游(1783—1835)が1817年大阪で開塾。蘭学、蘭医学、解剖学から天文学、物理学まで講義。緒方洪庵は、ここで蘭医学、蘭語を学ぶ。《鳴滝塾》

1824年、出島のオランダ商館付き医師シーボルト(1796—1866)が開いた医学塾。蘭語、医学、植物学等を講じる。卒業生=高野長英(蘭方医・兵学者、蚕社の獄で投獄・自殺)、伊東玄朴(蘭学者、蘭学塾象先堂開塾、日本初の種痘所開設)、伊藤圭介(蘭方医、種痘所・薬草園開設、東京帝国大学教授、日本初の理学博士)、美馬順三、岡研介、二宮敬作等。蘭学者、蘭方医学者を多数(100名超)を輩出。

《適 塾》

岡山藩士の子緒方洪庵(1810—1863)が大阪で、中天游から蘭学の手ほどきを受け、江戸で蘭方医坪井信道(1795—1848)の安懐堂で蘭方医学を学び、さらに長崎でオランダ商館長ニーマンにオランダ語と西洋医学を学んだ後、大阪に戻り、蘭学・医学塾を開塾。

教育は、蘭書で医学や自然科学を学ぶため、語学学習が基本であった。塾生は、まずオランダ語の文法書(グラマティカ)そして文章論(セインタキス)を書きし学んだ後、蘭書の会読に参加が許される。塾に唯一ある「ゾーフ辞書」を争って奪い合うようにして活用、自力のみで予習し、成果を会読で発表した。オランダ語を通じて、医学のほか、天文学、物理学、化学等、西洋の自然科学を原書で学んだ。

「入門者は、……まずガラマチカを教え、素読を授け講釈。……またセインタキスを教える。二冊の文典が解せられて……会読(輪講)をさせる」(福沢 1978 p.98)。

「生徒皆、一部のゾーフを杖とも頼むものなれば、ゾーフ辞書の部屋に立ち代わり入れ替わり詰め込みて、……辞書容易に手に取ることも叶わざる也……ゾーフ辞書の部屋徹宵の灯火見ざる夜ぞなかりし」(長与専齋古文書「松香私志」)。「蘭書で医学や物理、化学、天文学等を学ぶため、塾生は、まず、グラマチカとセインタキスを学んだ後、順番に唯一の辞書「ゾーフ・ハルマ」を使い原書を読み、輪講で順次和訳、他者が質問、

激しい議論が始まった。」(木本 2019b pp.26–27)

1862 年、洪庵は、將軍家の奥医師兼幕府西洋医学所頭取となって、江戸に赴き、塾は、養子の拙斎に引き継がれた。
門下生(612 名) = 福沢諭吉(思想家、慶應義塾創設)、大島圭介(西洋軍学者、外交官)、大村益次郎(洋学者、近代陸軍創設)、橋本佐内(洋学者、蘭学医、政治家)、長與専(斎(西洋医学第一人者、東京大学医学部綜理心得)、池田謙斎(東京大学医学部初代綜理)、佐野常民(枢密院顧問、日赤創設)、箕作秋坪(藩所調所教授、東京高等師範学校創立、国立科学博物館・国会図書館館長)、杉亨二(近代統計学の祖、啓蒙思想家)、飯田柔平、山口良哉、笠原健蔵、松下元芳ら諸藩の医学教育の指導者極めて多数(梅渓 1980 p.23 pp.42–43)。
寮生名簿だけでも 600 余名、通塾生を含めると 1000 余名になる当代随一の蘭語・医学教育機関。後世、大阪帝国大学医学部になる(木本 2017 p.20)

《象仙堂》

シーボルトの鳴滝塾に学んだ蘭学医伊東玄朴(1800 – 1871)が 1833 年、江戸で立ち上げた蘭方医学塾。入門者がひきも切らさず當時数百人に及ぶ。玄朴は、後年、日本初の牛痘接種所もたちあげた。後年、幕府の西洋医学所となり、維新後は、東京帝国大学医学部となる。

《純正書院》

蘭学医新宮涼庭(1787 – 1854)が 1839 年(天保 10)、京都東山に開塾した蘭方医学校。明治に入り京都府医学校、今日の京都府立医科大学である。

《蘭学塾順天堂》

佐藤泰然(1804–1872) は、シーボルトの鳴滝塾に学んだ高野長英に師事し、蘭学(オランダ語、蘭方医学)を学び、さらに長崎で蘭学医のもとで医学を学び、江戸に帰って、オランダ医学の「和田塾」を開設(1838)した。その後、佐倉藩主の招きで千葉佐倉に移住し「佐倉順天堂」を開塾(1843)、多くの蘭学医を育成、西の適塾に次ぐ東の順天堂と言われるまでになった。泰然は外科医ながら、麻酔薬を使わない開腹手術(1850–53)に多くの症例を遺した。後世の順天堂医学校。

《春林軒》

医者の家(現和歌山県紀の川市)に生まれ、京都で儒学、漢方医学、オランダ医学を学ぶ。1804 年、自身で開発した麻酔薬「通仙散」を使い、世界で初めて全身麻酔による外科手術(乳癌出)に成功し華岡流外科(麻酔手術)を確立した華岡青洲(1760–1835)が 1804 年に始めた病院兼医学教習所。我

が国初の和蘭外科医学校。

全国諸藩から医師 1000 余名が入門、和歌山城下及び大阪中之島分校「合水堂」を入れると門下生は 2000 人超の当代最大の私塾・医学教育機関である(木本 2019b p.26)。

現存する門人姓名録によれば、1861 名が記載され、青洲の手術後から亡くなるまでの 30 数年間だけで、実に 994 名の医師が全国から入門している(上山 1999 p.68)。

*「通仙散」京都遊学時に、儒学を学ぶ中で、「後漢書」(2 – 3C)に登場する古代中国(三国志時代)の医師「華陀」が麻酔薬「麻沸散」を発明し外科手術を施したという記述に触れ、全身麻酔薬の開発に取り組み、朝鮮朝顔とトリカブトを主成分とする麻酔薬「通仙散」を開発、世界初の全身麻酔による外科手術(乳癌摘出)に成功した。

*《麻酔薬による外科手術の歴史状況》

華岡青洲の全身麻酔による乳癌摘出手術(1804) 米人医師モートンのエーテル麻酔による外科手術(1846)

3.3 国学塾

《鈴屋塾》

本居宣長(1730–1801)は、商家出身の儒学者・国学者(古事記注釈書)で、医業の傍ら、1758 年、伊勢松阪の自宅で「源氏物語」「万葉集」「古事記」「古今和歌集」「伊勢物語」等、国学の講釈を始め、宣長の国学は、庶民の間にも広く普及した。門人は、庶民を中心に 500 人超であったが、各地に出向いて出張講義をおこなっていることから数百名以上の人気が鈴屋塾の教育に触れていることになる。

芳賀登の「幕末国学の展開」(1963)によると、鈴の屋の門人身分は、町人 33.8%、農民 23.2%、神官 14.1%、武士 13.8%、医師 5.5%、僧侶 4.7%、女性 4.5% となって庶民が圧倒的である。

宣長の長子春庭は、病弱のため、弟子の大平が家督を継ぎ本居国学を継承し、門人 54 か国、1036 人にも及んだ(「和歌山県教育史1巻」 2007 p.26)。

宣長没後の門下生に国学の巨人平田篤胤(国学者 家塾真管乃屋開塾 尊王攘夷運動)がいる。

《真管乃屋》1804 ⇒《氣吹舎》1816

国学者平田篤胤(1776–1843)が 1804 年開塾、1816 年江戸で開いた塾を「氣吹舎」と改名。以降、江戸各地及び駿府、秋田庄内で開塾。本居宣長の国学を発展させ、水戸学(武士

論理)と並ぶ平田国学(農庶民層の論理)を確立した。門人は553人であったが、没後に、1330人が記録されている。平田国学は、幕末期に、尊王攘夷思想に大きな影響を与えた。「国学思想の政治的側面は、反幕思想に形作られ天皇を本来あるべき姿に戻す運動(王政復古)に発展した。また、私塾を通して、農民層に普及した国学思想は、幕政批判を含意することで、地方庶民の政治意識を高め、維新後には自由民権運動へ昂揚していく素地を育んでいた」(ルビンジャー 1981 pp.142-143)。

3.4 洋学塾

幕末期、高等専門教育(薬草学、造船、鋳造、製鉄、兵器、高炉、天文学等)も多く誕生・発展し、当時の自然科学の学問レベルの向上に大きな役割を果たした。

《象山書院・五月塾》

松代藩下級藩士の佐久間象山(1811-1864)は、儒学・朱子学に纏いて海防や蘭学を研究し、1839年江戸に「象山書院」を開き、儒学や海防論を講義。教育方針は、「和魂洋芸」。

1851年、「五月塾」を開き、蘭学、西洋科学(砲術、電信実験、ガラス製造、地震計、医療器、砲術、西洋兵術、窮理、ガラス製造等)とともに海防論(海防八策)を教授する。吉田松陰や坂本龍馬、勝海舟はじめ橋本佐内(思想家、「啓発録」著す)、小林虎三郎(米百俵の教育思想家)、岡見清熙(福沢と慶応義塾創立)、加藤弘之(政治家、教育学者)、山本覚馬(新島と同志社創立)ら門下生500人に及ぶ巨大私塾。尊王攘夷思想に絶大な影響及ぼす(童門 1993 pp.205-208)。

《葦山塾》

葦山代官江川英龍(1801-1855)は、高島秋帆に砲術を学び、葦山に反射炉を作り、諸藩の藩士に西洋砲術を伝授した。弟子は、佐久間象山や中浜万次郎ら4000人にも及ぶ当代一大の巨大軍事火器塾である(童門 1993 p.220)。

《慶応義塾》

中津藩江戸屋敷では、前野良沢、杉田玄白による蘭書解剖本「ターヘルアナトミオ」の解説・翻訳が始まって80年後の1858年(安政5)、適塾塾頭であった福沢諭吉(1834-1901)が蘭学塾を開塾した。しかし、やがて、時勢に合わせて蘭語から英語学習及び洋学学習重視へと切り替えた。

「咸臨丸渡米・欧に際しては、通弁官中浜万次郎と同行し、欧米の文明に圧倒される。その折、中浜とウェブストルの辞書

を購入(日本初)して帰国した。帰国後は、蘭学はやめ専ら英語教授に専念、塾生も日増しに増加、塾舎を三田に移した。折しも、明治元年が慶応4年であったことから、塾名を慶応義塾とし、塾生は更に増加。維新の騒乱もやがて収まりを見せてきたが、明治5-6年頃までは、新政府も教育行政に手をつけられず、洋学や英学を教えるのは、当時慶應義塾のみであった(福沢 1978 pp.245-251)。

《攻玉社》

幕末の儒学・国学、洋学者の近藤真琴(1831-1886)が、1863年(文久3)、鳥羽藩江戸屋敷内に開いた蘭学塾。近藤は、藩校で儒学、高松謙庵に蘭学、窮理を大村益次郎の鳩居堂で蘭学、兵学、西洋科学を学び、福沢諭吉と並ぶ洋学者。

3.5 紀州の私塾

大阪、堺同様、紀州藩においても商工農業による豊かな経済繁栄が、文化人、歌人、画家を惹きつける魅力を持つところに官制でない自然発生的な私塾の教育が生まれ発展する。

和歌山城下

《修敬舎》

享保年間(1716-36)、陽明学、朱子学の一派で庶民道德の学派の心学(神道・儒教・仏教三教合一理論)を拓いた石田梅岩の弟子の手島堵庵(1718-1786)京都の豪商の子で心学を石門心学として大成が、全国各地で心学塾を開き(180か所)、1783年、和歌山の地で、石門心学の道場として開いた塾である『和歌山市要』1915)。

さらに、紀州湯浅出身の石門心学の巨人鎌田一窓(1721-1804)は、紀州において、篤信舎(和歌山)、樂善舎(海南)、亦樂舎(橋本)、有信舎(湯浅)、三樂舎(那賀)等、多くの心学講舎を開塾した。

《不如学斎》

天保14年(1843)、松島直内が和歌山城下に開いた儒学の塾。生徒200余名『和歌山市要』1915)。

湯浅地方は、留学僧覚心国師が中国径山寺から由良の興国寺に持ち帰った味噌(1249年=金山寺味噌)をルーツとして、江戸時代紀州藩の庇護も受け、醤油の醸造業が大いに発達、湯浅の産業は大いに栄え、醤油醸造業者も90余軒を数えた(安藤精一 1985)。

湯浅は、これら豪商の経済力に支えられ、学芸・教育・私塾も大いに発達し、和歌山城下、田辺(安藤藩)、新宮(水野藩)と並び、教育文化振興の拠点として大いに栄えた。

《槃潤塾》

1827年(文政9)、昌平坂学問所に学んだ儒学者野呂松盧(生没年不詳)が湯浅に来住し、私塾「槃潤塾」を開き、儒学、漢詩文を教え、地域の教育振興に大きな役割を果した。

《修正塾》(のちの敬業家塾)

槃潤塾に学んだ学僧石田冷雲(1822-1885)は、庶民を対象に「修正塾(のちの敬業家塾)」を創設し、儒学の古典素読・講義を中心に頼山陽の「日本外史」や水戸藩の「大日本史」等、ハイレベルな歴史教育も行われた。

維新後(学制発布 1872)、敬業家塾と改称され、教育内容は、さらに充実が図られた。

敬業家塾のカリキュラム(1876年)

1年=国史略、大学、論語、十八史略、

2年=論語、孟子、日本外史、十八史略、元明史略、

3年=孟子、中庸、日本政記、文章規範、

4年=左氏伝、大日本史、資治通鑑、唐宋八家文、

5年=詩經、書經、資治通鑑、史記、漢書、唐宋八家文、

福沢諭吉の西洋事情(『和歌山県史』)

「敬業家塾」に学んだ者は、1881(M14)の閉塾までの30年間で数百人に及び、楠本武俊(旭セメント社長)や木下友三郎(明治大学総長)等、明治時代をリードする有為な人材を多数輩出している。(『湯浅町誌』 1967 pp.570-71)

《古碧吟社》

裕福な醸造業者たちが開いた漢詩塾。広瀬旭壯や大久保詩仏ら全国一流の詩人が来遊する等、湯浅は紀州の漢詩文学の中心地となった(『湯浅町誌』 pp.564-65)。

《稽古場》

江戸時代末期、1852年、豪商浜口梧陵(1820-1885)が創設した私塾。のち「耐久社」(1866)となる。高名な武者・学者を招致し、村民子弟に武術教育とともに漢学教育を始め、寺子屋とは異なる高度な教育を施している。明治期、耐久中学となり、今日の県立耐久高校である。(『湯浅町誌』 pp.564-65)
因みに、耐久中学は、日本で3番目の古い歴史を持つ学校である。浜口の教育が、当地を日本有数の教育先進地とした。

林業・製材業による商業発展する紀州藩付け家老水野公の支藩新宮藩も教育学問の隆盛がおこり、私塾が発展する。

《鬱翠園》

伊藤東涯の堀川塾(古義堂、京都)に学んだ儒者宇井愷翁が、1731年(享保16)、新宮に漢学塾を開塾し、明治の学制の発布まで130余年にわたり、同塾は、多くの学徒を養成する。熊野文化の元祖恩人とも称されている『新宮市誌』(1984)。

《大石塾》

儒者宇井愷翁の鬱翠園に学んだ大石純蔵が、1831年(天保元)、新宮に開塾。漢籍(儒学)の読み、書き、算術から儒教道徳に基づく礼儀作法まで教授。学徒常時300人以上の大家塾。明治の学制までの門人数数千人に及ぶ。

「学んだ門人は、各地に帰り、寺子屋を開く。宇井塾と並び大石塾は、熊野文化史上に一大光明を与えた。」(『新宮市史第三編』 1937)

紀州藩付家老安藤田辺支藩は、熊野詣の交通の要所で、行政・産業の中心地の田辺も教育・文化の発展する町であった。《方円社》

1839年(天保10)、湯川長平が算術を教授。長平の子・退蔵は、儒学(経書)を教授した。

「その指導行き届き功績大なることから、苗字帶刀を許された。」(『田辺市史』 2003 p.741)

《修省》

町年寄脇村市太夫が、1863年(文久3)、漢学塾を開設、四書五経が講じられた。就学生は、常時70-80名。1870年(明治3)、郷校となり藩学校「修道館」となる。四書・五経、十八史略、史記、皇學を教授した(『田辺市史』 2003 p.741)。

4 郷校・郷学

郷校は、藩主が僻地士族や庶民の教育に始めた学校(岡山藩の閑谷学校、福山藩の廉塾等 120余校)と、庶民の組合組織や町村組合設立した庶民教育の学校があり、明治維新时期には、全国で1000余校を数えた。ここでは、儒学を中心書や計算が伝授され、「学制」公布時には、多くが尋常小学校になり、以降の日本の近代公教育に大きな役割を果たした。

《含翠堂》

摂津平野郷の豪商の家に生まれ、伊藤仁斎(儒学)や三輪執斎(陽明学)に学んだ儒者土橋友直(1685-1730)が平野の豪商・豪農の経済的支援のもと始めた大阪初の民間学問所(1717)である。儒学と実践道徳とともに書算教育を通して、民

衆教化運動に取り組む郷民の教育機関である。ここでは、孟子、大学、論語、経学等が講じられ、儒学教育が行われた。後大阪商仁が始めた「懐徳堂」の開設(1724)に影響を与えた。《京都小学校》

1869年、京都の町組が開設した学校。

《小野路郷学》

1871年、武蔵の国に地域の有力者が自主的に開設した学校。

5 寺子屋

庶民の教育機関として、「寺子屋」教育が発展した。寺子屋は、中世における寺院教育を母体とするもので、呼称はそれに由来するとされている。「日本教育史資料」8,9巻によれば、明治5年(1873)で11,237校が確認できる。明治16年文部省調査の「日本教育史資料」23巻では、16,560校が記録されている。が実際には、これをかなり上回る数が存在したであろう。「明治政府編纂の日本教育史資料には、全国約15,000の手習所(寺子屋)と約1,500の私塾があげられているが、この調査には、不十分な部分が多く、実際には、約75,000の手習所と約6,500の私塾が存在したとも言わっている。」(大石 2007)

この数は、規模こそ異なるが、1872年(M5)、明治政府が学制で想定した尋常小学校開校目標数の53,760校(設置経費地元負担から、実際に開校できたのは12,558校(M6))をも大きく上回る数字である。因みに、平成30年度学校基本調査では、全国小学校の数は当時と規模こそ異なるが、19,892校である。

幕末には、これら寺子屋、手習い塾は、その数2万校を優に超えるまでになり、明治の学制発布に伴う近代学校教育(小学校教育)の大きな基盤力となつた。

「江戸では、経済(商業、農業)の発展に伴い、庶民の間にも就学熱が高まり、明治の初めには、大規模(100名以上)の寺子屋が約1100校が存在した。江戸寺子屋の特徴は、諸地域と比べ生徒数がはるかに多いことで、中石水の寺子屋に至つては500人も在席していた」(高沢 1991 p.395)。

紀州では、幕末、寺子屋は、297校(習字271、漢学・算術18、漢学8)が確認できる(『和歌山県史』1989)。このうち和歌山城下には、20校が確認されるが、それ以前は、さらに多数があったと考えられる(『和歌山史要』1915 p.544)。しかし、明治維新以降編纂の各自治体資料を加えて集計すると、寺子屋の数は、合計630校となる(『和歌山県教育史第一

卷通史編1』2002 p.40)。

通常、和歌山県と全国の係数比を1:100とすると、和歌山の寺子屋の数を630とすれば、大石の全国の寺子屋数75,000という数字には、相当の妥当性が頷ける。

寺子屋での学習の大部分は、「手習い」と「読み物」で、やがて「算用」が加えられた。これには、幕府のお触書(通知書)を読むことや農業・商業経済の発展に伴って、売買文書、契約書等、文書を「読む・書く能力」や商いや測量、勘定、取引等を行う上での「計算能力」が、生活上また職を得る上で必要条件になるという社会的ニーズも加わり、読み・書き・計算の庶民教育が広く普及した。そのため、幕末期、商業・工業・農業等を生業とする庶民階級の就学率は、4割から6割近くにも達して、世界一の教育レベルであった。

教材としては、「庭訓往来」をはじめ、職業別に「百姓往来」「商売往来」「番匠往来(職人)」「船方往来」「女庭訓往来」さらには、「万国往来」「文明開化往来」等、時代と社会のニーズを反映するものまで多種多様の教材が使われた。

*【往来物】「庭訓往来」(家庭の教え)「消息往来」(作文
交際)「国尽」(地理・社会)「町尽」(地理・社会)

「商売往来」(商業読本)、「百姓往来」(農業読本)

読み物、書の教材には、「実語教」「童子教」「千字文」「父母状」および「四書」「五経」も多用された。

*【実語教】仏教、儒教(経伝)の教えの中から選んだ道德
教書。明治以降も儒教道德の基本。

「山高故不貴、以有樹為貴」「人肥故不貴、以有智為貴」「玉不磨無光、無光為石瓦」「人不学無智、無智為愚人」「人而無孝者、不異於畜生」「是學問之始、身終勿失」

*【童子教】平安時代の仏僧安然の作(1658)。

儒教の書經・五経の教えから選んだ子供の道徳教書。
「生而無貴者、習修成知徳」「愚者無遠慮、必可有近憂」
「夫貴人前居、顕露不得立」「人間成一礼、師君可頂戴」

*【千字文】中国六朝時代(晋)の人倫道徳のテキスト。

「上和下睦、夫唱婦隨」「仁慈隱則、造次弗離」「孝當竭力、忠則盡命」「資父事君、日嚴與敬」「蓋此身髮、四大五常」「天地玄黃、宇宙洪荒」

*【父母状】紀州藩祖徳川頼宣が作成した儒教道徳文書。

「父母に孝行に、法度を守り、へりくだり、奢らずして、面々家職を守り、正直を本とすること、誰も存じたる事なれど、常に下に教え申し聞かすべき也。」

論語の引用が随所に見受けられる。

「事父母能竭其力、事君能致其身、与盟友交、言而有信」「入則孝、出則悌」「孝悌也者、其為仁之本与」
儒教価値観に則る「父母状」は、明治の「教学聖旨」や「教育勅語」に多大の相関性が認められる。

「読書は、素読で、実語教、童子教、父母状、今川状などの教訓書や往来物を主とし、……高度な場合は、四書（論語・大学・中庸・孟子）五経（易教・司教・書經・春秋・礼記）等の中国古典も教えた」（『和歌山県教育史一通史編Ⅰ』2007 p.48）。

「中田の寺子屋（1870）の教材は、四書・五経であった。同校は、翌年郷校となり、漢学（四書五経）、十八史略に加えて皇学が教えられた。」（『「田辺市史Ⅱ巻』』2004 p.741）

「上級者の読み物教材として、四書・五経（特に孝経）、実語教、童子教、千字文等が使われた。」（栗栖家文書「生馬村郷土誌稿」1987 p.378）

「寺子屋の学科は、習字を主として、珠算も教授し、さらに優秀な者には、四書・五経が使われた。」（『新宮市誌』1984）

「寺子屋の学科は、習字、読書で算術を加えるところもあった。読書の教材は、実語教、童子教を主として、四書・五経や文選を教えるところもあった。」（『湯浅町誌』1967 p.565）

「寺子屋の教材は、家康訓、父母状、商売往来千字文、庭訓往来、今川帖であった。」（『和歌山市要』1915 p.544）

八代将軍吉宗は、人民教化に熱意を持ち、菅野兼山（1680－1747）に幕府援助の私塾を「会輔堂」を創設させるとともに室鳩巣に命じて、儒教哲学に基づく道徳律の「六諭衍義大意」を出版（1722）させ、江戸の寺子屋に教材として無料配布した。
『六諭衍義』明の洪武帝発布の子供用道徳書（1398年）

「孝順父母」「尊敬長上」「和睦郷里」「教訓子孫」「格安生理」「毋作非為」

このように、儒教哲学・価値観は、あまたの寺子屋でも広く伝授され、明治以降の近代公教育の大きな礎として機能した。

【寺子屋就学率】

江戸末期の寺子屋への就学率は、驚くほど高い。
利根李三郎の『寺子屋と庶民教育の実証研究』によれば、関東地域での就学率は、農村 20%、商業的農業村 40～50%、宿場農村 40%也、……篠谷次郎の『幕末北河内地方寺子屋就学率』は、同地方で 8割としている（大石 2007 p.101）
「1850 年の頃の日本人の就学・識字率は、70～86%といわれており、同時期、イギリスの主要工業都市でも 20～25%（1837 年）、フランスでは、わずか 1.4%（1793）、ロシア帝政時代の

モスクワでは約 20%（1850 年）であった」（准将 2017）。

【庶民識字率】

必定、識字率も驚くほど高い。天野郁夫は、「学歴の歴史」のなかで、江戸後期から幕末期の簡単な識字率を約 80%としている。こうしたことを裏打ちするデータでは、「嘉永年間（1848～1854）の識字率は、江戸府内全域では、70～80%で、農村部を除くと 90%という推測もある。武士階級は 100%であることから、この時期、全国平均で、男性は 40～51%、女性は 15～21%であったとの研究結果もある。」（「寺子屋の実態 25JKI00」ネット archives 2017）

高尾善希の「近世後期百姓の識字の問題」では、1831 年（天保 5）武蔵国赤尾村では 95%、高橋敏の「村の識字と民主主義」では、1856 年（安政 3）駿河国御宿村では、100%、前沢哲の「幕末・維新时期における民衆の文字修得」では、1872 年（明治 5）、大阪河内国志紀群では 80% の研究データがある。（大石 2007 pp.101-102）

八鍬友広は、「19 世紀における識字率調査」で、明治初期の文部省調査による 6 歳以上の国民識字率では、滋賀県は約 75%、岡山県で約 60% としている。

幕末期から維新时期に、来日した外国人も日本人の高い識字率に一様に驚いている。

1853 年（嘉永 6）、浦賀にやってきたペリーは、日本人の識字率の高さに驚愕し、「この国の教育水準はすごい。いつかアメリカの強力な競争相手になる。」と日記に記している。
「教育が、帝国の至る所に普及している。」（マシュー・ペリー 1955）

日本は、ロシアや西欧のラテン語諸国より、識字率が極めて高い。読み書きの能力などは、日本の全ての国民にとって当たり前だと考えられている。人夫、別当、召使、女中、店で働く小僧・娘まであらゆる一般大衆が、本をむさぼり読んでいる。これは、家康が教育の振興について率先して範を示し、諸大名もそれに従うとともに多くの私塾や寺子屋があまた開設されたことによる（メーチニコフ 1883 p.204、214、262）。

「日本人のすべての人一男、女、子供一が、紙と筆と墨を持っている。全ての人が、読み書きの教育を受けている。……手紙による意思伝達は、我が国（アメリカ）におけるより広く行われている」（マクドナルド 1981）。

「日本人は、世界を通じてもっとも教育の進んだ国である。読み書きのできない人間や法律を知らない人間は一人もいない」（ゴローニヤン 1946）。

「日本には、少なくとも日本文字と中国文字で構成されている自国語を読み書きできない男女は、いない」（シュリーマン 1865）。

「日本では、教育がヨーロッパの大半の国々が自慢できる以上によくゆきわたっている」（オールコック 1962）。

こうした庶民の極めて高い就学率と識字率に支えられる学問の基本は、漢籍から学ぶ儒教価値観である。即ち、幕府及び諸藩の教育は、言うに及ばず、私塾（圧倒的多数の漢学塾）さらにはあまたの寺子屋の教育においても、漢籍学習（漢籍素読）が学問の基本として定着し、長く連綿と受け継がれてきたことが、我が国近代教育の礎を見事なまでに形成している。

6 明治維新以降の近代公教育に見る儒学・朱

子学の学問的価値観

1872年（明治5年）、我が国近代公教育は、国民皆学を目指す「学制」の発布により始まった。それまで、幕府・諸藩の学校及び私塾・郷学・寺子屋で2世紀半以上にわたって行われてきた儒学・朱子学を中心とする近世教育は、明治に始まる近代公教育に大きなインパクトを与えた。

1879年（M12）、元田永孚（明治天皇侍講、朱子学者）は、儒教主義的皇國觀に則る教育方針「教学聖旨」を勅語で発布した。教学聖旨は、「仁、義、忠、孝」を明らかにすることが教育の根本と示され、儒教道徳を「本」とし、知識・才芸を「末」とする儒教第一主義の教育哲学の聖旨であった。

《教学聖旨》

「教学ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ智識才藝ヲ究メ以テ人道ヲ盡スハ我祖訓國典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナリ………仁義忠孝ヲ明カニシ、道徳ノ學ハ孔子ヲ主トシテ、人々誠実品行ヲ尚トヒ、然ル上各科ノ學ハ、其才器ニ隨テ益々長進シ、道徳才芸、本末全備シテ大中至正ノ教學天下ニ布満セシメ」

儒教道徳は、「修身」という教科で教授されることとなった。この科目名の由来は、「大学」の「修身・齊家・治国・平天下」に由来する。1881年（M14）「小学校教則綱領」が出され、「修身」が教科の筆頭に位置付けられた。そして、「小学校令施行規則」（1900年 M33）で、小学校では、週2時間、中学校では1時間、高等女学校では、3年生まで2時間、4年生以上は1時間教授されることとなった。

「修身」の指導内容は、必定儒教道徳に則り、編纂された。

《修身教科書》は、1904年（M34）以降 1945年（S20）年までの国定教科書となる。

《修身教科書の儒教シラバス》

内容1 素直な心を持つ。（正直、誠実、良心）

内容2 慎む。（謙遜、質素、儉約、寛容、報恩、整理・健康）

内容3 札儀を正しくする。（名誉、礼儀）

内容4 行いを律する。（自己規律、自立、規則・時間を守る）

内容5 夢。（立志、起業、職務勉励、産業振興、間宮林蔵）

内容6 勤労。（勉学、正直、師弟、孝行、職務精励、勝海舟）

内容7 辛さを乗り越える。（自身、忍耐、克己）

内容8 困難に立ち向かう。（勇気、負けじ魂、高田屋嘉兵衛）

内容9 目的達成。（忠義、男女の勤め、忠孝、佐久間艇長）

内容10 合理的精神。（男女の勤め、迷信）

内容11 ルール順守。（規則、国法）

内容12 家族尊重。（父母、孝行、兄弟、忠君愛国、松下村塾）

内容13 友達を大切に。（朋友）

内容14 思いやり。（博愛、宮古島の人々、瓜生岩子）

内容15 力を合わせて。（協働、心ひとつに、焼けなかった町）

内容16 みんなのため。（公益、近江聖人、能久親王、九十老）

内容17 日本人として。（ダバオ開拓、山田長政）

内容18 美しく生きる。（万物の長、復習）

《尋常小學校修身教科書（三年生）文部省 1928（S3）年発行》

1.皇后陛下のやさしさ 2.忠君愛国 3.孝行 4.仕事に

励む 5.学問 6.整頓 7.正直 8.師を敬う 9.友達

10.規則 11.行儀 12.勇気 13.堪忍 14.沈着 15.皇大神

16.祝日 17.儉約 18.慈善 19.報恩 20.寛大 21.健康

22.自分のもの人のもの 23.協働 24.助けあい 25.公益

26.生物の憐れみ 27.よい日本人 〈教育勅語〉

1890年（M23）、井上毅と元田永孚（明治天皇侍講）は、「教育二関スル勅語」を起草した。二人は、ともに熊本藩校時習館で、朱子学を学んだ政治家・学者であった。

勅語は、「忠孝、孝悌、信、恭檢、博愛、学問、勤労、智、德器、遵法、義勇、祖先崇拜、皇運扶翼」等、儒教価値観に則る教育理念に係る勅語である。

《教育勅語》

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ 我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一二シテ世々厥ノ美ヲ済セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス 爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ

朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ
以テ知能ヲ啓発シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常
ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ
天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ…………斯ノ道ハ實ニ我力皇
祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ
通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服
膺シテ咸其徳ヲ一二センコト庶幾フ

明治 23 年 10 月 30 日

御名御璽

江戸時代、幕府の昌平黌や諸藩の藩校、郷校、及び私塾、寺子屋では、儒学・朱子学を中心とする漢籍教育が行われてきた。又、国学、史学、暦学、天文学、和漢医学、薬草学さらに、江戸後期から幕末には蘭学をはじめ様々な洋学(外国语、造船、航海、精練、溶鉱炉、軍事学等)も教授・研究された。この漢籍教育は、維新後も漢学塾や家塾、家庭で、漢籍の素読指導が行なわれるとともに近代公教育にも引き継がれ、中等教育では、国語漢文科、国語及び漢文科として、国語、数学、英語とともに主要必修教科として位置付けられ、「四書・五經」「史記」(司馬遷)「十八史略」「近体詩・古体詩」等が教材とされた。とりわけ、中国古典名文選「唐宋八大家文」(沈徳潜編)は、漢籍教育の手本教材として明治以降も広く重用された。

《史記》「漢軍及諸侯兵、囮之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌、」「項羽妬賢嫉能、有功者害之、賢者疑之。此所以失天下也。此三者皆人傑也、吾能用之。此吾所以取天下也。」「大行不顧細謹、大礼不辭小讓」「項王笑曰天亡我何渡為……吾為若德、乃自刎而死」

《十八史略》「今王必欲致士、先從隗始。況賢於隗者、豈遠千里哉」「臣敢不竭股肱之力、効忠貞之節繼之以死」「人生如朝露、何自苦如此」「始以強壯出、及還鬚髮尽数白」

《唐宋八大家文》「博愛之謂仁。行而宜之、之謂義。由是而之焉、之謂道。足乎己、無待於外、之謂德。仁與義為定名。道與德為虛位。」「欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。」(韓愈)「古之学者必有師。師者所以傳道受業解惑也。吾師道也。道之所存、師之所存也。」

漢籍は、1945 年(S20)まで、教養教育の重要な一角をなし、政治家、経済人、文人、学者、軍人の教養の証ともなった。

乃木希典(「金州城外の作」)

西郷隆盛の詩才(偶成)「不為兒孫買美田」

夏目漱石(七言句)「午院沈沈緑意寒、石前幽竹石間蘭。」

【音楽教育に見られる儒教文化】

明治維新後、文部省は多くの洋楽を導入したが、その歌詞をつけるにあたって、漢籍から歌詞をつけた事例がある。

*米国の大学で卒業時に歌われていた“Song for the Close of School”は、日本の卒業時に歌われる「仰げば尊し」になった。2番の歌詞は「身を立て名をあげやよ励めよ」とあるが、当時の文部省の音楽担当者が「孝経」の儒教価値観に則る「身立行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」から、歌詞をつけたと思われる。

*スコットランド民謡“Auld Lang Syne”は、「螢の光」として導入されたが、文部省の国学者稻垣千穎は、作詞に際して漢籍「晋書」の「螢雪の功」に典拠を求めたとされる。

* “Song for the Close of School” 1871 年 T.H. Bronson の作、アメリカの卒業の歌。1884 年文部省小学校歌集に集録。

アメリカ音楽教材集(1871 年)に Song for the Close of School が集録されている。一橋大学名誉教授桜井雅人発見 2011)

*「螢の光」 4世紀三国志の時代の東晋の貧しい苦学生車(しゃ)胤(いん)が、夏は螢の光で、冬は雪の月からの反射光で苦学・勉学し、大成した話。螢雪の功。(「晋書」)

7 戦後教育における漢籍教育

戦後、漢文は、高等学校で選択科目として履修されてきたが、1960(S35)年告示の学習指導要領で、漢文教育が必修科目(古文・漢文)として復活する。しかし、1999 年(H11)告示の学習指導要領では、「国語総合」の中で、古文・漢文を学習することとなり、古典(古文・漢文)は、再び選択科目となる。2008 年(H20)改訂の学習指導要領でも、必修科目は、「国語総合」であるが、多くの普通科高等学校では、「古典 B」が選択必修として履修され古文学習とともに漢文学習が行われている。漢籍学習は、今日まで脈々と受け継がれてる。

《高等学校学習指導要領》精選古典B(平成 26 年発行)

1. 小説六篇(十八史略、世說新語、先哲叢談)
2. 近体詩(唐詩三百首=五言絶句・七言律詩、唐詩選、杜工部集、懷風藻、漱石全集)
3. 史記(司馬遷の史書、太史公書、項羽本紀、高祖本紀)
4. 思想(論語=陽貨・里仁・衛靈公・顏淵・学而・為政・憲問)

- 篇、近思錄、孟子、荀子、老子、莊子、韓非子)
5. 小説1(世說新語、太平廣記)
 6. 詩2 古体詩(詩經、陶淵明、唐詩三百、杜工部集、
 7. 文1 文二編(楚辭、古文真寶後集)
- 《世說新語》「漱石枕流」(劉義慶)
 《先哲叢談》「自此後、果多生蛤、遂為名產。衆始服其遠慮。」(原善)
 《唐詩三百首》「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」(張繼)
 「昔人已乘黃鶴去、此地空余黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠」(崔顥)
 《唐詩選》「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還……輕舟已過萬重山」(李白)
 《杜工部集》「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤日夜浮……」(杜甫) (西岡 2016)

8まとめ

江戸時代 265 年に及ぶ幕府・諸藩の教育機関および私塾・郷学・寺子屋で行なわれてきた儒学・朱子学を中心とする近世教育は、明治維新後の近代公教育に大きな影響とインパクトを齎し、さらには、戦後の教育にも根本的な理念・哲学にその痕跡を確認することができる。とりわけ、人として生きる上の哲学すなわち「道徳律や価値観」の形成において、また、多くの言語表現や生きる上でのよりどころとする格言や教えの中に、儒教哲学のよって立つものが無数に確認できる。歴史的にマクロな視点で診ると、こうした漢籍(儒学)学習は、日本人の価値観・哲学・思想形成に大きな役割と影響を果たしてきた。儒学・朱子学の漢籍学習は、今日においても道徳価値観の形成、思想等、あらゆる面に直接間接両面で大きな影響を及ぼしている。道徳的価値観・倫理観形成に「孝悌」「仁義」「忠恕」「礼智信」「誠実謙讓寛容」「立志精進」「学問の意義と価値」「修養の哲学」「人格形成」等、あらゆるフェーズに、その顕在が確認できる。とりわけ、言語表現においても、儒教・漢籍表現のいかにも多くのものが、我々の日々の生活の中に、今も厳然と生きているかは、枚挙にいとまがない。我々誰もが、日々何気なく使用している漢籍表現・語彙を若干挙げる。

《以和為貴、四面楚歌、五十步百歩、切磋琢磨、病人膏肓、鼎輕重、巧言令色尽鮮、溫故知新、惻隱之情、往者不追 来者不拒、夜聞漢軍 四面皆楚歌、吳越同舟、明

鏡止水、乾坤一擲、捲土重來、天真爛漫、人生如朝露、何自苦如此、為政以德、學而不思則罔、思而不學則殆、吳越同舟、今王必欲致士 先從隗始、上和下睦、夫唱婦隨、巧言令色鮮仁、禮之用和為貴、吾十有五而志乎學、五十而知天命、溫故而知新、吾日三省吾身、… ほか》

「儒教は、孔子以来 2500 年にもわたり(弘大な時空を生き続けてきた。…………儒教は、なぜかくも長い時間と広い空間を獲得できたのか。それは、歴代の政権が、その権力を維持する装置として利用し続けたということだけで済まされるものではなく、儒教が、人間の心や社会の発する波長を捕えていたが故であろう。…………儒教の名で語られた思想は多様であつて、その多様な儒教の中には、現代に生命力を保持しうるものは(多く)存在するはずである。…………儒教とともに、孔子の教え、朱子学、陽明学、黄宗羲の儒学、清朝考証学、荻生徂徠ら江戸時代の古学等、一律でわりきれぬ豊饒な世界を持っているのであって、これらの中に現代が直面している問題を受け止める思想(哲学)は(十二分に)ありうる。」(土田 2016 p.v) ()内は筆者追記。

参考文献・資料

- 安藤精一編 (1995)『人づくり風土記 30 和歌山』農山魚村文化協会
 安藤精一 (1985)『近世都市史の研究』清文堂
 稲垣忠彦 (2003)「郷学校の発展と学習内容」帝京大学文学部『紀要教育学』28号
 井出草平 (2014)「江戸時代の教育制度と社会変動」『四天王寺大学紀要』57号 pp.207 – 222
 上山英明 (1999)『華岡青洲先生 – その業績と人となり – 』医聖・華岡青洲顕彰会
 海原徹 (1983)『近世私塾の研究』思文閣
 梅溪昇 (1980)『緒方洪庵と適塾』大阪大学適塾記念会
 大石慎三郎ほか(1988)『人づくり風土記 26 京都』農山魚村文化協会
 大石学 (2007)『江戸の教育力』東京学大学出版会
 沖田行司 (2011)『藩校・私塾の思想と教育』日本武道館
 小倉紀蔵 (2012)『入門 朱子学と陽明学』ちくま新書
 乙竹岩造 (1929)『近世庶民教育史』目黒書店
 オールコック、ラザーフォード(1962)『大君の都』岩波文庫

- (山口光明訳)
- 海野恵一 (2018) 『教育勅語と日本の精神と儒学』 e-book
- 貝塚茂樹 (1973) 『論語』 中公文庫
- 貝塚茂樹 (2004) 『孟子』 講談社学術文庫
- 加藤仁平 (1940) 『伊藤仁斎の学問と教育』
- 金谷俊一郎(1996) 『日本人の美德を育てた修身の教科書』
PHP 新書
- 上富田町誌編纂委員会 (1998) 『生馬村郷土誌稿』(栗栖家
文書) 上富田町
- 木本毅 (2017) 『教育学概論』 日本印刷出版
- 木本毅 (2019a) 「紀州徳川家の教育」 和歌山信愛女子短
期大学『信愛紀要』 第 60 号 pp.57 –63
- 木本毅 (2019b) 『教育原理』 和歌山印刷
- 木本毅 (2019c) 「江戸幕藩体制下の教育と思想」 和歌山
信愛女子短期大学『信愛紀要』 第 60 号 pp.65 – 80
- 木本毅 (2019d) 『新教育制度論』 ウィング印刷
- 串田久治 (2003) 『儒教の知恵』 中公新書
- 小島毅 (2017) 『儒教が支えた明治維新』 晶文社
- 江連隆 (2009) 『論語と孔子の事典』 大修館
- ゴローニヤン, バシリー (1946) 『日本幽囚記』 岩波書店
- 斎藤泰雄 (2006) 「日本における教育発達の歴史」
『日本比較較教育学会紀要』 33 号 pp. 1 –18
- 佐久間正 (2007) 『徳川日本の思想形成と儒教』 ぺりかん
社
- 佐々木俊介 (1991) 『人づくり風土記 大江戸万華鏡』
農山魚村文化協会
- シュリーマン, ハインリッヒ (1982) 『日本中国旅行記』 1865
講談社学術文庫(石井和子訳)
- 新宮市誌編纂委員会 (1984) 『新宮市誌』 新宮市
- 准将「江戸時代を学ぶ - 寺子屋の実態 第1回<25JKI00>」
<https://kijidasu.com/?p=41256> 2018-12-1 閲覧
インターネット archives 2017 pp.1 – 10
- 末廣利人 (2014)『広瀬淡窓』 日田市教育委員会
- 高沢憲治 (1991) 『人づくり風土記 大江戸万華鏡』
農山魚村文化協会
- 高橋敏 (2007) 『江戸の教育力』 筑摩書房
- 田辺市誌編纂委員会 (2003) 『田辺市誌』 田辺市
- 土田健次郎 (2016) 『儒教入門』 東京大学出版会 v
- 東京書籍 (2012) 『精選古典 B 漢文編』 東京書籍出版
- 童門冬二 (1993) 『私塾の研究』 PHP 文庫
- 利根啓三郎 (1981) 『寺子屋と庶民教育の実証的研究』
雄山閣出版
- 奈良本辰也 (1974) 『日本の私塾』 角川文庫
- 西岡智史「明治 41 年漢文教科書 漢文教科書の推移」
https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/36091/20141016211753904930/Ronso-Kokugokyoikugaku_10.1.pdf pp. 1 – 8
- 芳賀登 (1963) 『幕末国学の展開』
- 福沢諭吉 (1978) 『福翁自伝』 岩波文庫
- 藤本篤ほか(2000) 『人づくり風土記 27・49 大阪』
農山魚村文化協会
- 古川薰 (1995) 『松下村塾』 講談社
- ペリー, マシュー (1955) 『ペルリー日本遠征記』 岩波書
店 (土屋喬雄訳)
- 星川清孝 (1976) 『唐宋八大家文読本』 明治書院
- マクドナルド, ラナルド (1981) 『日本回想記』 刀水書房
- 松浦友久 (1990) 『儒教とは何か』 中公新書
- 松浦友久 (1991) 『中国名言鑑賞事典』 ぎょうせい
- 向島成実ほか(1988) 『中国名言名句の事典』 小学館
- 明治政府編纂 (1872) 『日本教育史資料』 文部省
- メーチニコフ, レフ・イリイッチ(1874) 『回想の明治維新』
岩波文庫 (渡辺将司訳)
- 守屋洋 (2010) 『四書五経の名語録』 日経ビジネス文庫
- 文部省 (1992) 『学制百二十年史』 文部省 ぎょうせい
- 八木秀次(2002) 『尋常小学校修身書』 小学館
- 山岡宗八 (1987) 『吉田松陰 2』 講談社
- 山本正巳 (2008) 「近世私塾の歴史的研究」 慶應義塾大學
文学部教育學専攻選考山本研究室 (1 – 79)
- 湯浅町史編纂委員会 (1967) 『湯浅町史』 湯浅町
- ルビンジャー, リチャード (1979) 『私塾』 サイマル出版
- 和歌山市要編纂委員会(1915)『和歌山市要』 和歌山市
- 和歌山県教育史編纂委員会(2002) 『和歌山県教育史1巻・
2巻・3巻』 和歌山県教育委員会
- 渡部昇一 (2013) 『国民の修身』 産経新聞出版